

## アユ人工配合飼料の研究（要旨）

岡 彬・菅生裕・戸田久仁雄・高橋昭夫

全国湖沼河川養殖研究会アユ初期飼料研究部会では、ふ化後60日前後（全長25mm）からの健全な種苗を育成するための人工配合飼料の開発を目的として、関係機関による連絡試験を実施しているが、本年度はこれまでの飼料をもとに、油脂の添加が仔魚の成長、生残、体形異常の発生防止に対する効果を明らかにすることを主目的とし、あわせて飼料の製造法の違いによる影響およびレシチンの添加効果について検討を加えた。

本試験の結果については、アユ初期飼料研究部会「初期人工配合飼料の研究」昭和57年度連絡試験報告書としてすでに報告されているので、ここでは要旨のみを記載する。

1. 当場が分担した試験区はクランブル法レシチン6%添加区（3区）、付着造粒法油脂6%添加区（5区）、付着造粒法レシチン6%添加区（6区）の3区で、各2槽ずつ設けた。
2. 供試魚はふ化後96日を経過した平均全長28.2mm、平均体重61.6mgのもので、0.5トンパンライト水槽6面に各1,000尾ずつ収容し、人工汽水の循環濾過方式により飼育した。
3. 飼育期間は60日間と定められていたが、試験開始後32日目から各区でへい死が目だち始めたので、34日目に飼育水を淡水に切替えたところ、各区とも病弱魚を中心として大量へい死がみられた。このため、この時点で試験を中止した。
4. 各区で摂餌状況に目だった差はみられなかった。クランブル法レシチン添加（3区）の飼料が一番さらさらしていて水面にきれいに広がった。
5. 当場が分担した試験には油脂、レシチンとも無添加区が含まれていないため、十分な考察ができないが、同一製造法（付着造粒法）の油脂添加区（5区）とレシチン添加区（6区）を比較すると、生残率ではほとんど差がないものの成長では6区の方がかなり優れていたことから、油脂よりもレシチンの方が添加効果が高いと考えられた。
6. クランブル法（2区）と付着造粒法（5区）の比較では生残率、成長とも両区でほとんど差が認められないことから、飼料製造法の違いによる差異は見出されなかった。